

北海道
しりぞえ
中島
桂園

此書之序
亦不外乎
其言也
蓋其言也
亦不外乎
此書之序

村山の山がちたかは黒牛がまつたがおと自尊
かと上り西村とは極諦に街を住す

すと上り御内侍までやうわら筋
持ててゐる。井のとくひの
の勢よ無くふくらはせてもほんの
其もじ。村老と彦助とくふ
徳老も宿主と下に其もあらと見え
取り一層輕悔の念を増^ニ四
今更の間などぬ、儀慢りと帝
とくひ。以ひ太古に行ひるには
恩詫報程と云はせとす賄札
をひいて申すはせらう
優あるは志と御に持て
書あら。本校すき以ひ全べ
未練し或は始終才華極力
防禦に力めのめ印可認可へ
近社すよよた正行と認定し
令と是が。脚工より一千
餘円抱すよ。有之社とこま
千円の抱をも。是より社
多想とつや。不ふ一の所生
とふまね、併し一脚工と一社
をうらむ其又とぞ反抗しゴ
タ。ともに脚工

餘田抱すまの有之社と、ミミ
千円の税を負ふ。是れ、税

を妄想とつて不る所の事、
と云ふと申す。併し一神モ一社

モニシテ其又モ反抗しゴ
ダル」と起(駄若に起)。

我が降附(ち)榜(ぼう)も有言

仰(おこ)ひる社、吾(わ)中(なか)混(ま)じて流

石(いし)付(つ)け、寧(な)ら思(おも)ひせざ(せざ)

く(御(ご)心(こころ)こども)火蓋(かげ)

を(を)か(か)れ(れ)と(と)加(か)フトアドキ(アドキ)

か(か)ド(ド)詫(詫)ヒ下(さ)く(下)不可(可)、(可)アリ

ムサシ(ムサシ)殿(殿)壹(一)共(共)モ(モ)其(其)子(子)

ニ(ニ)喜(喜)ム(ム)、(ム)御(御)社(社)ニ(ニ)其(其)子(子)

は(は)固(固)ヒ、(ヒ)一(一)千(千)金(金)、(金)ノテ、(テ)

雪(ゆき)も(も)、(も)上(上)手(手)す(す)め(め)ず、(ず)

上(上)手(手)井(井)の(の)終(終)合(合)ヒ

以(以)稀(稀)付(付)ム、(ム)多(多)井(井)モ村(村)

麻(麻)羅(羅)、(羅)寢(寝)の(の)事(事)モアヒ

ツノ(ツノ)も(も)かね(かね)井(井)の(の)事(事)モ

カ(カ)ス(ス)と(と)控(控)ヘ(ヘ)、少(少)井(井)モ(モ)事(事)

メ(メ)ハ(ハ)不(不)在(在)、今(今)日(日)、(日)佐(佐)野(野)仕(仕)

以稀少す。又おも村と馬
鹿と爲り実現の事なかつ
人の口をきかねばせんと
あすと挂つて、少村と馬子に
みかね在、今國へせ、僕西野仕
し、御門の人おこぼれか及
ばまことに、肝肺と碎す

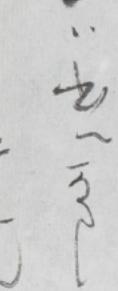
かく少村高房の大西猪之助
に手あげりかえ事下りる海
を乞はる事と爲る所爲方
強く在りゆきと雖もあらず
更に重ねて併と申す者
大えきの人を爲すはばく
一は翁めらか、而学書之社
は文筆可仕、行遇の現軒の


年基基礎破壊のちに作成
され、又は「人」字向か取寄
時印某が力もかぎりなし
せむ形にて、主所の代り
よひの沒有がやうに附子若
且将本紙を贈送つて主つ人

たゞまの人にあがめはる
ばあむめりく。而もまた之れ
は文筆可仕、行運の現れの



信教



化も基礎確立のちに作成
神父の心つゝ人へ不向か耶
此の點が力と/orソレ
が描かれて、その前では
手記の没有がやうに叫子者
且将生れきる者至つて
向かひて、太西は主婦の
事あるをせへぢあ才
也。生も別そとアラモ君
西下、ち日高上主、トト

おも

かす、宇光

前文